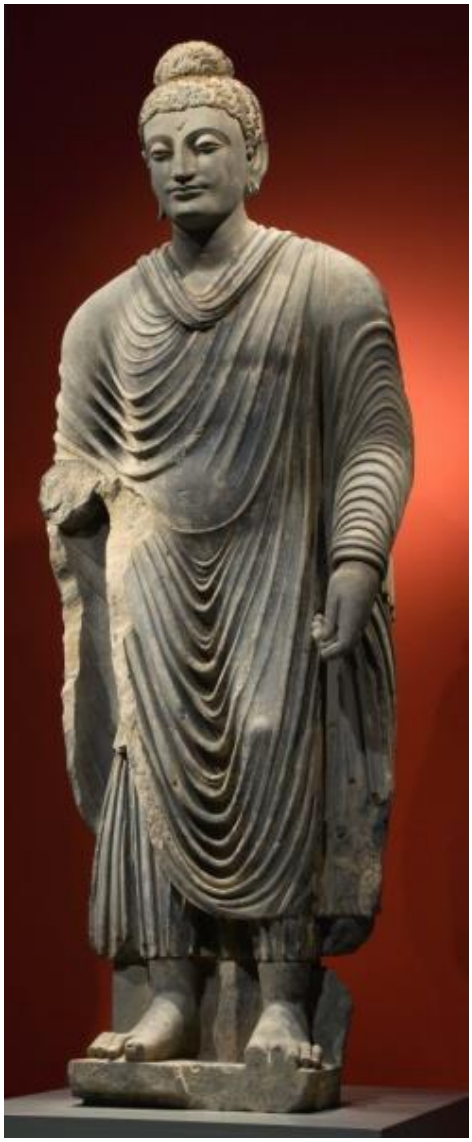
石仏あれこれ

シリーズB 石仏を考える

B4 カニシカ王（仏像の出現）

森隆一



ガンダーラ仏

MIHO MUSEUM ホーム・ページ

解像度を下げトリミング

B4. カニシカ王（仏像の出現）

4.1. インド外への仏教の伝播

仏教・仏像は中央アジアに伝わり、シルク・ロードを通って中国に伝播する。また、海のシルク・ロードを通って東南アジアに伝播する。後者が中国に達したかは分からない。禅宗は南伝仏教の影響があるというのを見た気がする。

シルク・ロード

（中央アジア） の状態はどうであったか。ここでは、人の多く住んでいるのは、オアシス都市だろう。寺院は都市の中か近郊の丘の上に造られた。

現在はイスラム教地域であり、寺院は破壊あるいは遺棄された。発掘に依るしかない。調査報告は入手困難で、入手できても簡単に読めるようなものではない。

ソ連の崩壊に伴い、これらの地域への観光ツアーが盛んになってきている。Web にある旅行者の撮った写真と旅行記が、アマチュアにとっては、主な情報源となる。

次の図は、宗恩寺のホームページ＞「釈尊の生涯」から得たものである。

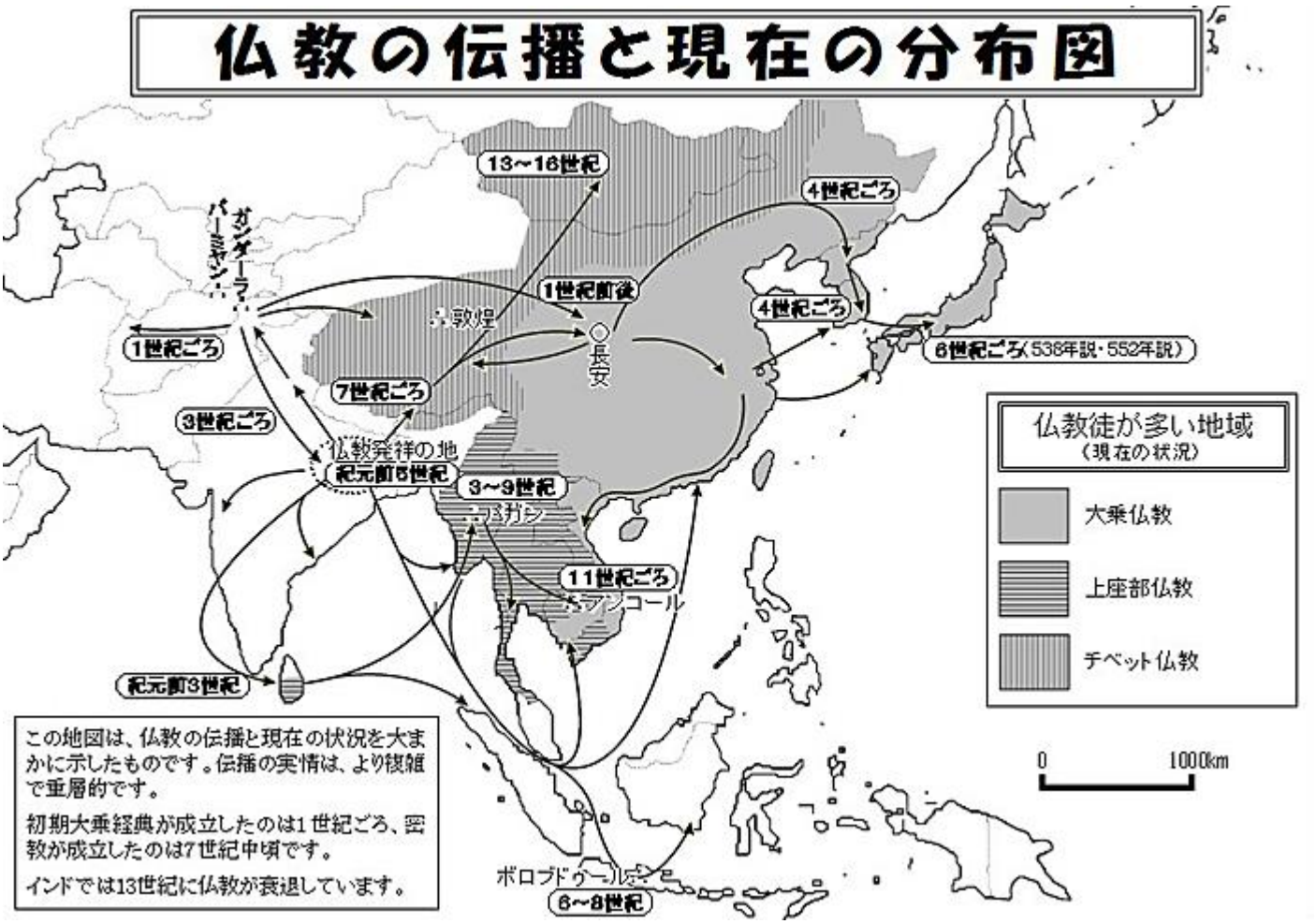


図 B4.1 仏教の伝播

インドからシルクロードに行くためにはカイバル峠を通るしかない。このルートを通って伝えられた仏教は大乗仏教と呼ばれている。

Wikipedia「大乗仏教」では、**大乗仏教に分類される代表的な仏教経典としては、般若経(般若心経はその核心を簡潔に記したもの)、法華経、浄土三部経、華厳経、(大乗の)涅槃経、大日経、金剛頂経などが挙げられる。**と書かれておる。

Wikipedia「カイバル峠」では

カイバル峠は、パキスタン(連邦直轄部族地域)とアフガニスタン(ナンガルハール州)の間にある峠。古代から文明の回廊として重要な役割を果たし、南アジア世界と中央ユーラシア世界を結ぶ交通の要衝であった。最高地点の標高は約 1070m。

カイバル峠は古代から数少ない侵入路となっていた。カイバル峠を越えるとアフガニスタンのジャラーラーバードへと至る。紀元前 1500 年頃、このカイバル峠を越えてアーリヤ人がパンジャーブ地方に侵入した。紀元前 326 年ごろにはアレクサンドロスがこの地を通り、西北インドのパンジャーブ地方にまで侵攻したが、部下の反対によって引き返した。

と書かれている。パンジャブ地方は、現在イスラム教になっている。インドと同様に、仏教寺院は、あったとしても、破棄され埋もれていると思われる。発掘の可能性のあるのは中々ないであろう。その他の国は、独立後そんなに時間がなく、経済が安定し少し発展するまでは発掘は難しいであろう。

西に位置するペルシャには仏教は伝播しなかった。かわりにゾロアスター教が成立した。

Wikipedia「ゾロアスター教」概要では次のように書かれている。

イラン高原に住んでいた古代アーリア人はミスラやヴァーユなど様々な神を信仰する多神教(原イラン多神教)であった。この原イラン多神教を基に、ザラスシュトラ(ゾロアスター、ツァラトゥストラ)がアフラ・マズダーを信仰対象として紀元前 7 世紀頃に創設したのがゾロアスター教のルーツである。

紀元前 6 世紀のアケメネス朝ペルシア成立時、既に王家と王国の中枢をなすペルシア人のほとんどが信奉する宗教であったとも言われている。これに対し、3 世紀のサーサーン朝成立まで、長らくアーリア人の諸宗教の一派に過ぎなかったとする見方もある。サーサーン朝期には聖典アヴェスターが整備された。また、活発なペルシア商人の交易活動によって中央アジア・中国へも伝播していった。

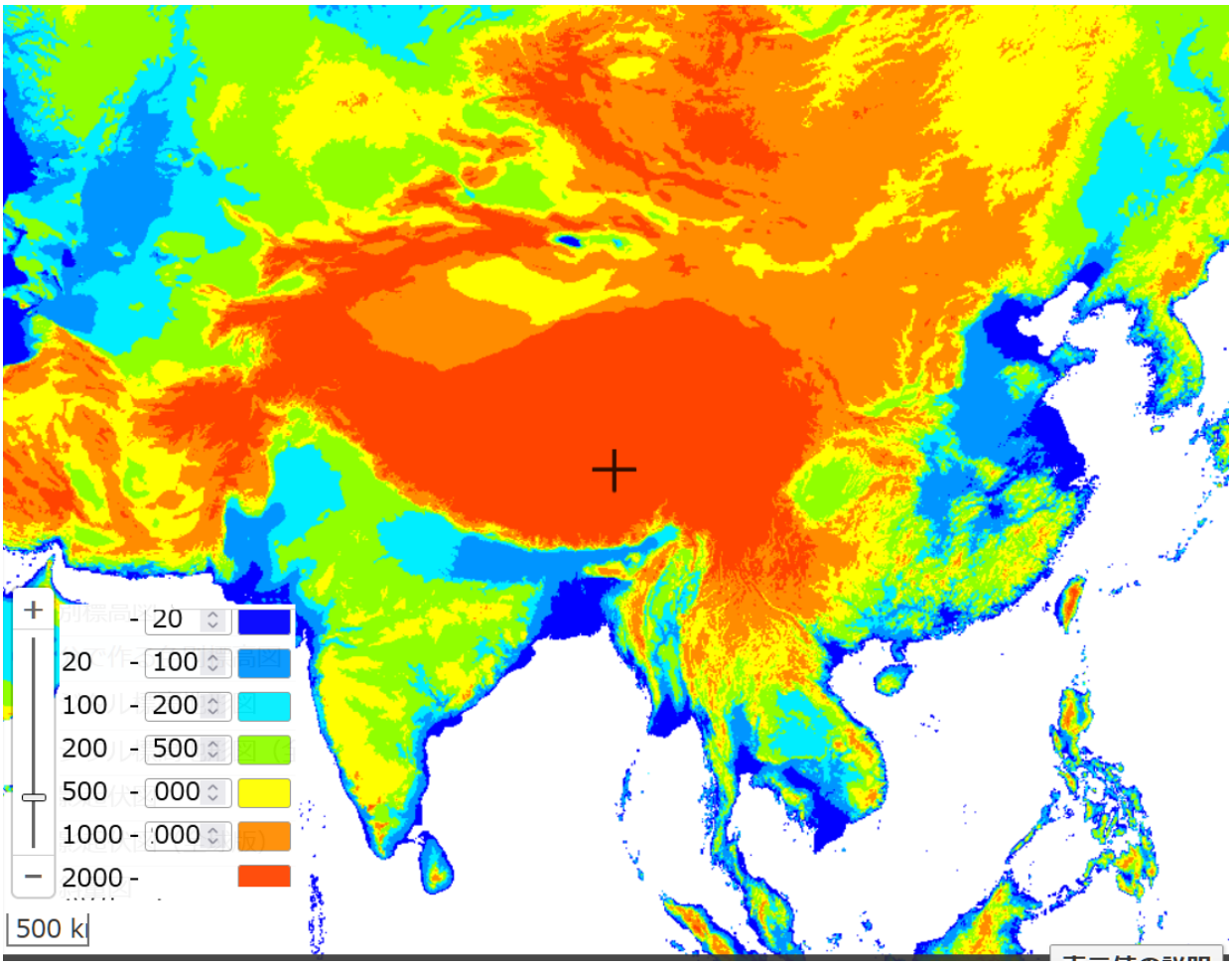


図 B4.2 地勢インド中国

‘イラン アフガニスタン 峠’ に対する Google「AI による概要」では、イランとアフガニスタンの間に峠はありません、と書かれている。

‘イラン パキスタン 国境’ に対するGoogle「AI による概要」では、イランとパキスタンの国境地帯は、治安が極めて不安定、と書かれえていることから、公路があったと思われる、砂漠地帯のはずである。

ペシャワール → カイバル峠 → カブール → サマルカンド
→ パミール・アライ → キジル → 敦煌 → 蘭州

で伝播したと考えるのが妥当ではないか。このうち、カブール → サマルカンド → パミール・アライ の部分を中央アジア部分と呼ぶことにする。源氏の国では、アフガニスタン・タジキスタン・ウズベキスタン・キルギスの部分である。キジル → 敦煌 → 蘭州 の部分を中国部分といい、新疆ウイグル自治区と甘粛省に属する。

シルクロード：中央アジア部分

「古都散策らくがき庵」＞「三尊形式と其の他の如来」
「シルクロード④中央アジア①」、「シルクロード⑤中央アジア②」、
に写真が掲載されている‘6世紀に王国を建てた突厥時代の石人’は修那羅にあってもそれ程の違和感は無い。

中央アジアでの商人・遊牧民ではタイのように仏教をとりいれることは殆ど不可能と思われる。仏教の変化、すなわち、大乗仏教の確立が必要である。Wikipedia「大乗仏教」には、1 世紀頃に大乗仏教が成立した、と

書かれている。

Wikipedia「華厳経」では、インドで伝えられてきた様々な経典が、3世紀頃に中央アジア(西)でまとめられたものである。

Wikipedia「法華経」では、初期大乗仏教経典の1つであるサッダルマ・プンダリーカ・スートラ(「正しい教えである白い蓮の花の経典」の意)の漢訳での総称。

バーミアン(カブールの西北)では1世紀から石窟寺院が造られた。

バーミアン石窟は最近タリバンによる破壊で有名となった。修復が検討されている。どこまで修復するのか。恐らく、タリバンによる破壊の前であろう。この修復では、写真等の資料が残されており、どのように修復するかの議論は殆どなく、どう修復するかの技術的な問題が主である。顔の部分は、自然崩落もあり得るが、イスラムによる偶像破壊の一環として、破壊されたとも言われている。

旧ソ連では石窟寺院は報告されていない。恐らく石窟寺院を彫ることが可能な岩盤がないのではないか。

都市そのものが遺跡となっている

シルクロード：中国部分

キジル千仏洞は3世紀後半である。約200年かかって石窟寺院は中国

の端に伝播したことになる。

　中国内では石窟寺院しか残っていないようである。故城跡の中に仏教遺跡もあるようだ。

中国旅行-Arachina「キジル千仏洞」Wikipedia「キジル石窟」、「ベゼクリク千仏洞」、「クムトラ石窟」、中国旅行-Arachina「クムトラ千仏洞」chackee.com「クムトラ千仏洞」(ベゼクリク千仏洞、交河故城(ヤルホト))Wikipedia「交河故城」、「スバシ故城」、「ミーラン遺跡」

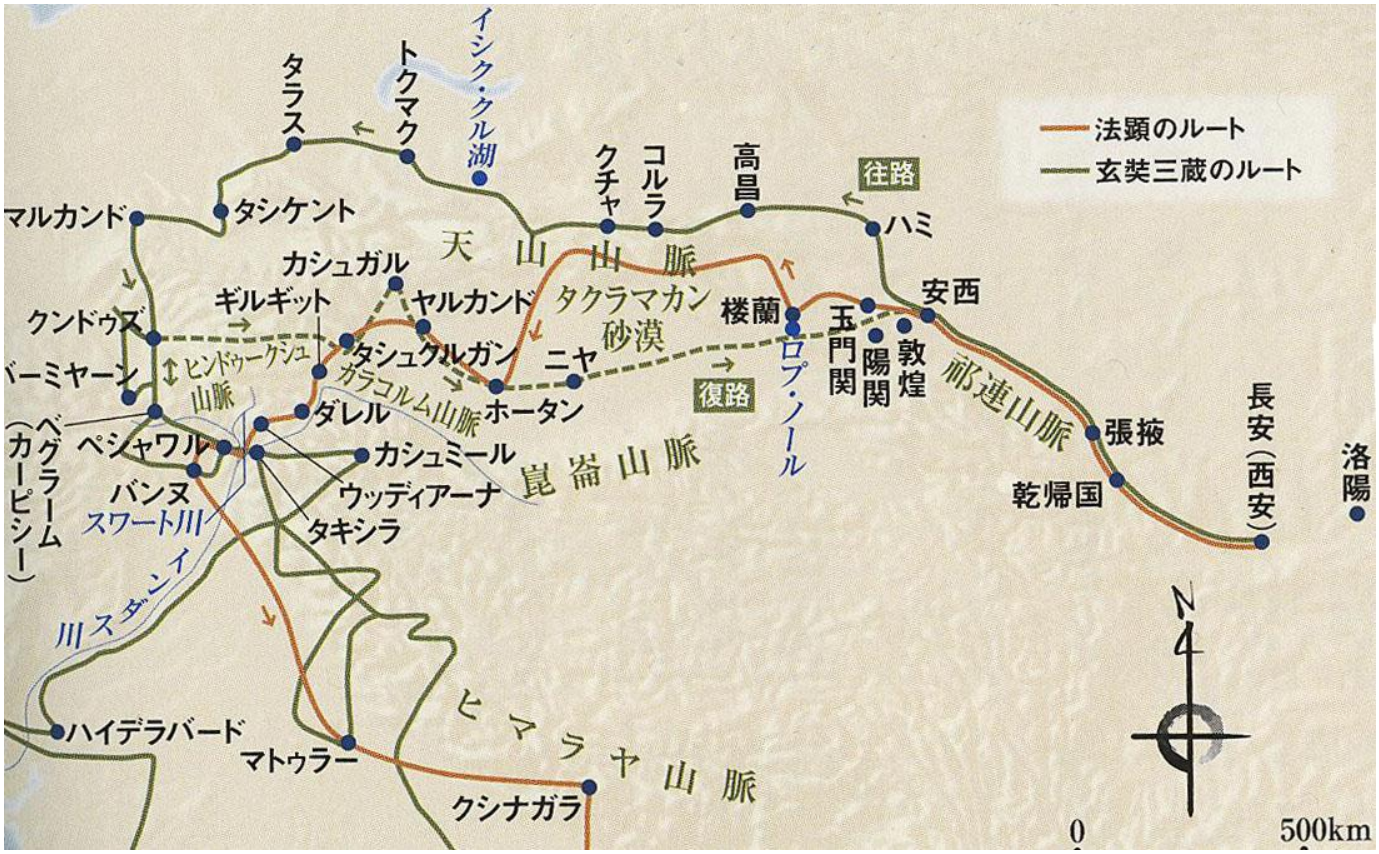


図 B4.3 法顕と玄奘三蔵のルート

半分ほどは中国に属するが、敦煌(蘭州)辺りまではここに含める。

伝播のルートの参考になるのは、Wikipedia「法顕」、「玄奘三蔵」の旅程であろう。共に修行と経典を求めてインドへの旅を行った。法顕は海のシルク・ロード(南回り)で帰国した。法顕(337-422)、玄奘(602-664) のルートに相違があるのは、政情に依るものか。Wikipedia「シルク・ロード」

図の引用元

「智笑ポエム「輪廻」(時空を旅する者)」

https://miyakojimacity.ti-da.net/d2014-02.html では「シルクロード日誌」 https://ameblo.jp/akaeboshi/entry-11371846714.html

を引用か

表 B4.1 年表 500 年まで

インド	中国	東夷
BC464-BC383 釈迦		
BC317-BC180 マウリヤ朝	BC1046-BC256 周	
BC268-BC232 アショカ王	BC206-8 前(西)漢	BC108 衛氏朝鮮滅亡
3次結集		漢四郡
BC2C グントゥパッリ石窟		
BC2C バージャー石窟		
BC1C-2C アジャンタ前期		BC37-668 高句麗
この頃仏像	25-220 後(東)漢	
75- クシャーナ朝	仏伝中国 白馬寺	
4代王カニシカ		
3C 華厳経	220-280 三国時代	280-290 魏志東夷伝
	3C後半 キジル千仏洞	
	304-439 五胡十六国	313 楽浪・帯方郡滅亡
	355or366 敦煌・莫高窟	346-660 百済
		356-935 新羅
	386-534 北魏	372 仏伝高句麗
	394-416 麦積山石窟	384 仏伝百済
	420-479 宋	倭の五王
	420 炳霊寺石窟	414 広開土王碑
	420 雲崗石窟	432 後漢書
5C後-6C アジャンタ後期	472 玄中寺	475 百済公州遷都
5C-6C バーミアン	5C-9C クムトラ千仏洞	
5C-10C エローラ	493-499 鞏県石窟	
	494-520 龍門石窟	
	529 竜興寺北魏仏	

4.2. 石窟寺院

石窟寺院は紀元前 2 世紀にインドで始まった。以下でみる神谷武夫氏の論文からはリュキア(トルコ)の石窟墓は紀元前 4 世紀で、前 8 世紀後半から前 7 世紀前半にかけての石窟や岩壁彫刻もあるということである。

インドと中国とそれらの周辺の著名な石窟寺院を図にしてみた。

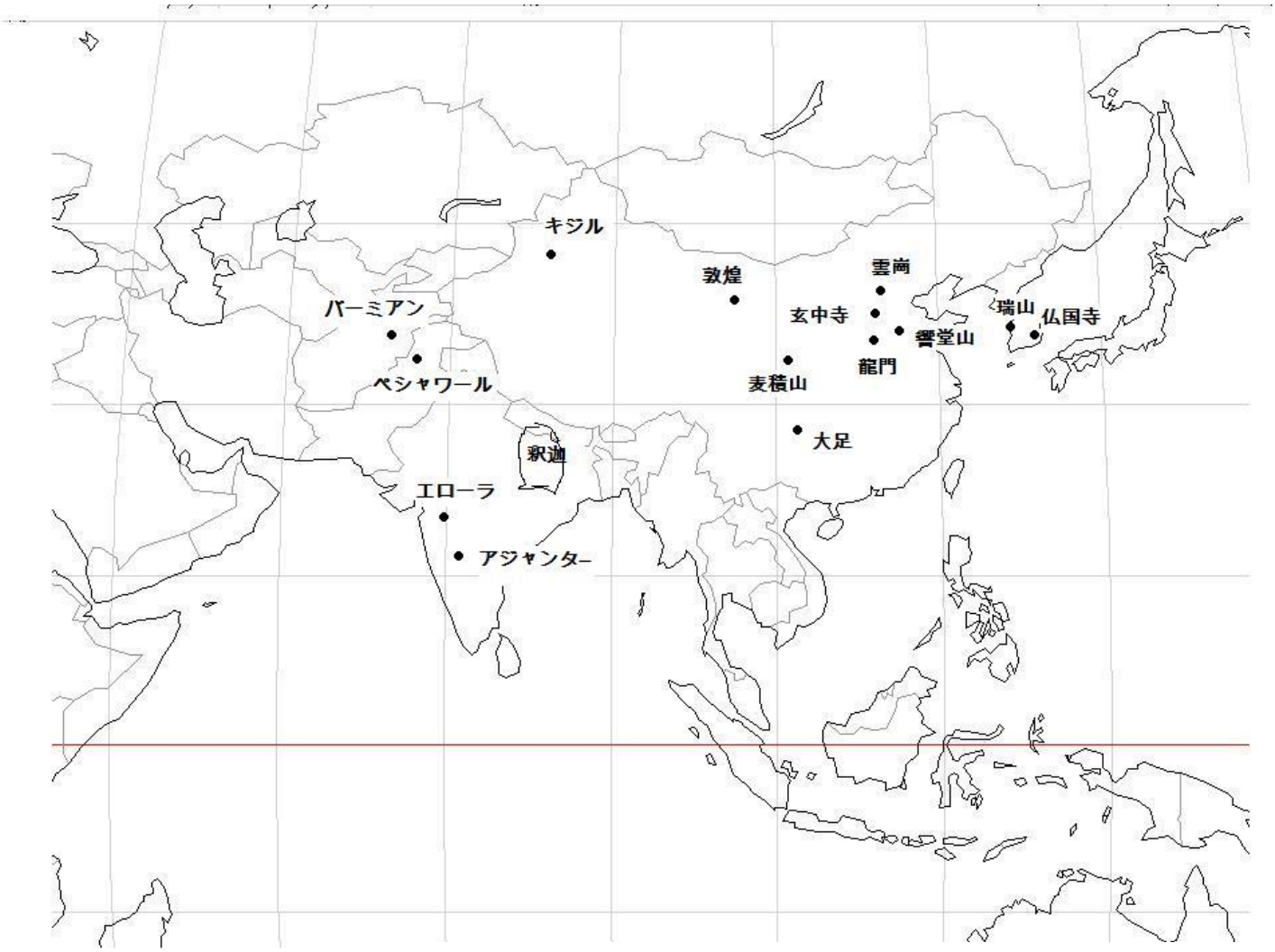


図 B4.4 著名な摩崖仏・石窟仏

アジャンター石窟群やエローラ石窟群は岩盤をくり抜いて造られたと

いう。

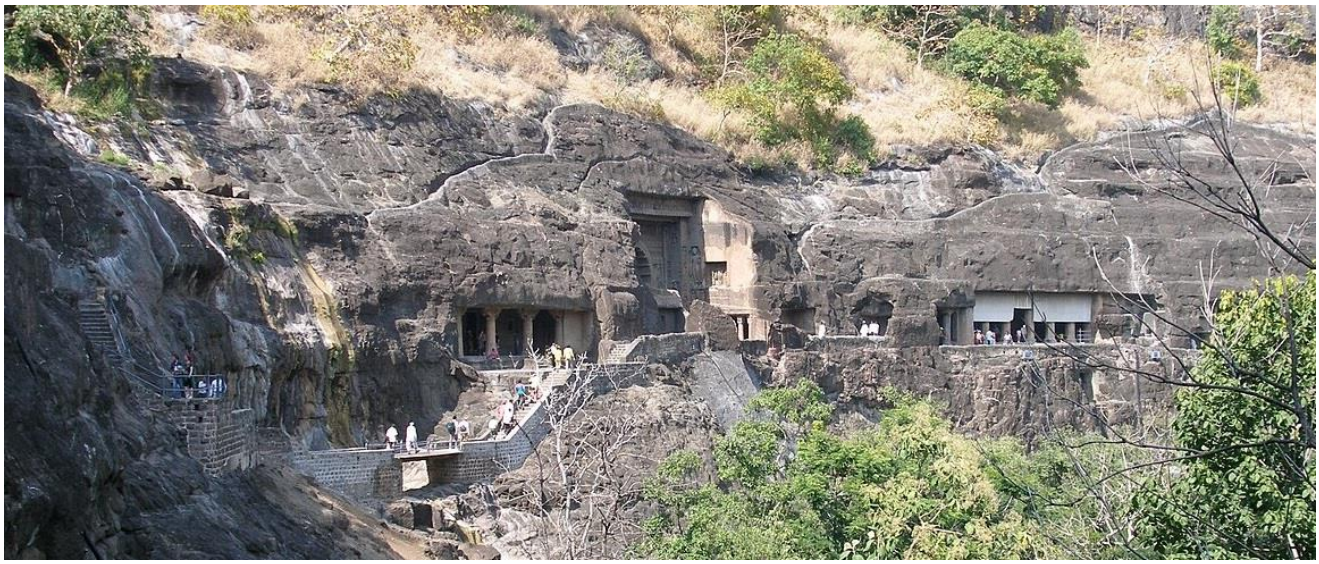


図 B4.5 アジャンター石窟群遠景（Wikipedia「アジャンター石窟群」より）

次の 3 枚の写真加 Wikipedia「雲崗石窟」より得たもので、図 B4.6 は雲崗石仏の代表として教科書にも載っているものである。図 B4.7 は覆屋が建てられている。覆堂といいたいが堂とは呼べない気もするので、重ねて覆屋堂とでも呼ぶことにする。図 B4.6 と図 B4.10 の窟にも覆屋堂が造られていたと考えている。これは、石窟の上部に四角い穴が幾つか見られこれに梁や桁を差し込んだのではないかと思えることである。前の部分から礎石でも出ればとも思うが、これは無理と思われる。

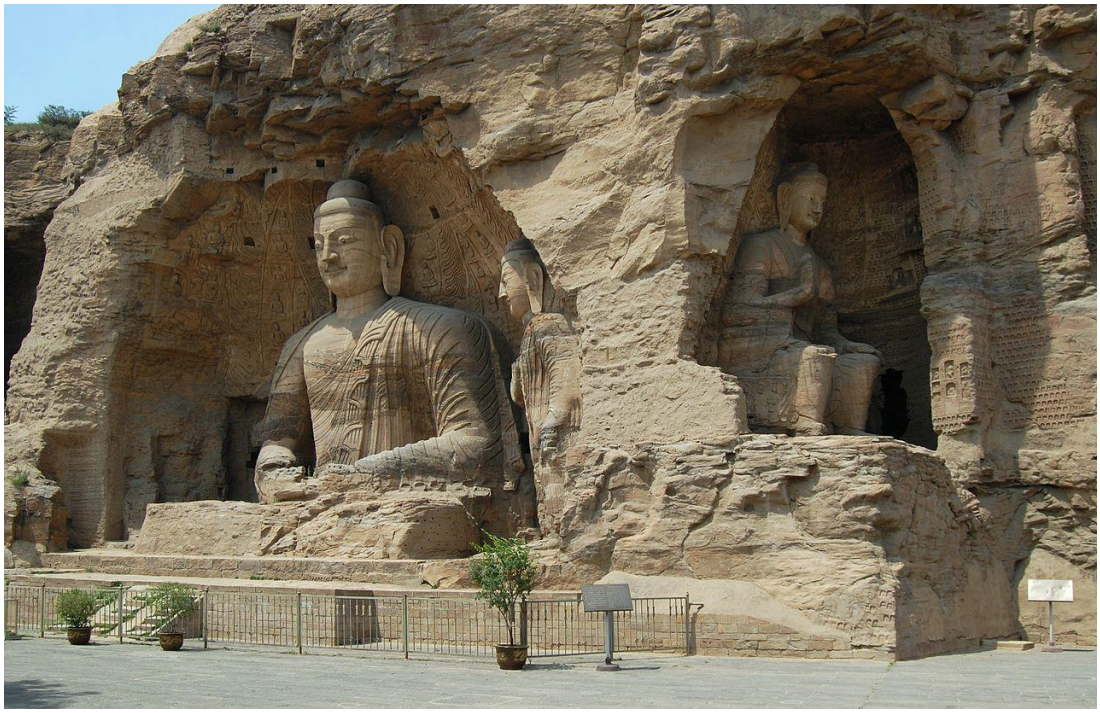


図 B4.6 雲崗石窟　(Wikipedia「雲崗石窟」より)

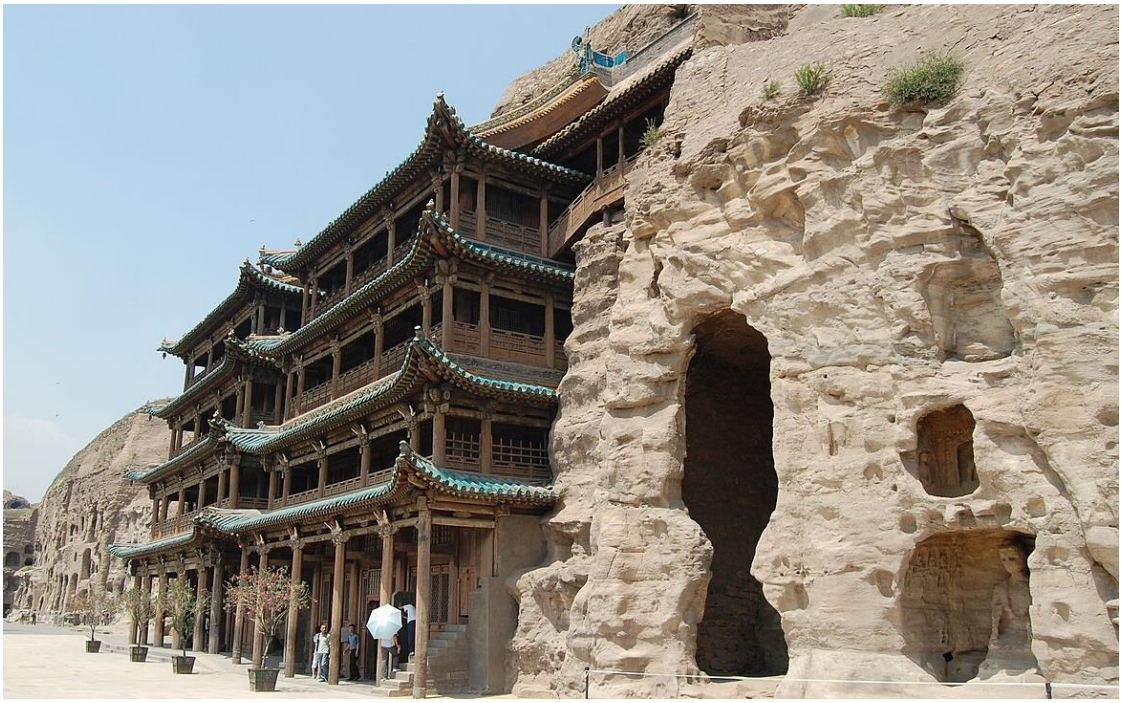


図 B4.7 雲崗石窟　(Wikipedia「雲崗石窟」より)

図 B4.8 雲崗石窟遠景　(Wikipedia「雲崗石窟」より)

龍門石窟も見ておく。

図 B4.9 龍門石窟遠景　(Wikipedia「龍門石窟」より)

図 B4.10 龍門石窟 奉先寺洞（Wikipedia「龍門石窟」より）

石窟墓

神谷武夫は、リュキア建築紀行「石窟寺院の謎」で、

リュキア(トルコ)の石窟墓が起源と提唱されている。ここでは、リュキアで石窟墓や石棺が多くつくられたのは紀元前 4 世紀のことと書かれている。さらに、フリュギアはリュキアより古く、エスキシェヒールとアフヨンの間に広がる丘陵地に散在する村や山には前 8 世紀後半から前 7 世紀前半にかけての石窟や岩壁彫刻がある。と報告されている。

石窟墓に関しては、リュキア建築紀行「インドの石」で、

石窟寺院は インド人が発明した形式ではなく、エジプトから アナトリアやペルシアへと伝わった洞窟墳墓の形式が、さらにインドに伝来して 最も建築的な構成をとるに至ったものである。これが仏教と共に中国に伝えられると、インド以上に 数多くの石窟寺院が開窟されたものの、インドとは様相が違う。

また

尖頭アーチ状をした屋根構造であって、ここでは詳しく述べる余裕がないが(興味のある方は このＨＰの中の「リュキア建築紀行」をお読みいただきたい)、アレクサンドロス大王の東征に伴って伝えられた リュキアの石棺 および石窟墓の造形の影響だと考えられる。

戸原のトップページ＞海外紀行＞「ペルシャ/聖地ナクシェ・ロスタム」

模糊の旅人＞「巨大磨崖ナグシュ・ロスタム（前編）～ペルシアの旅(33)」

模糊の旅人＞「巨大磨崖ナグシュ・ロスタム（後編）～ペルシアの旅(34)」

イラン旅行記＞「ナグシェ・ロスタム」（アケメネス朝歴代皇帝の王墓とササン朝皇帝の栄光のレリーフ）では、

古代ペルシャにも石窟墓が紹介されている。これは、アケメネス朝・ダリウスⅠ世以下４人の王墓で、BC6 世紀から BC5 世紀にものである。

石窟墓としては上記リュキアより古いということになる。

インドへの影響を考えれば、近いペルシャが直接の影響を及ぼしたと考えるのが妥当ではないかと思っている。

洞窟住居は文明成立以前から行われていた。古人骨は殆どが洞窟から発見されている。死者を弔うために、その住んでいた洞窟をそのまま残すことは自然と思われる。

人が住めるような洞窟がどの程度あったのであろうか。岩壁の窪んだ部分に木を斜めに立てかけ固定すれようなものが考えられる。

カッパドキアの地下都市跡を思い出したので、調べてみた。

Wikipedia「カイマクル」

カイマクルはトルコのカッパドキア地方にある町。地下 8 層に及ぶ地下都市跡がある。

内部には教会、学校、ワイナリー、食料貯蔵庫などが作られ、約 2 万人が暮らしたと考えられている。 各階層は階段や傾斜した通路でつながれている。 カイマクル地下都市と隣りの「デリンクユ地下都市」の間には地下通路が確認されている。 ローマ帝国の迫害を逃れてこの地に辿り着いた初期キリスト教徒たちが隠れ住み[1]、何世紀もかかって掘り進められて拡張されてきたが、作られた年代は謎に包まれている。紀元前から存在し、ヒッタイトによって作られたと考えられている。

幾つかの旅行者から紹介されている。このうち読み易い

TOURQUA「カッパドキアの隠れた魅力・地下都市」では

トルコのカッパドキア地方は、柔らかい凝灰岩からできている地下都市として有名です。気球が飛んでいる写真を見たことがある人も多いのではないでしょうか。カッパドキアで発見された最も有名な地下都市としては、デリンクユ・カイマクル・オズコナック・タトラリン・マズ・オズルジェがあります。

これら紀元前 3000 年から存在すると思われるカッパドキアの地下都市は、1985 年にユネスコの世界遺産に登録されたカッパドキア地方の一部となっています。

カッパドキアの地下都市の歴史

カッパドキア地方は、数百万年前から堆積した火山灰でできています。

立ち並ぶミナレットのような奇岩は、雨や川の流れで侵食されてできたものです。数千年前には、カッパドキアのヒッタイト人が岩を掘って地下都市を作りはじめました。当初は、貯蔵や食品庫として使うために作られましたが、敵であるフリギア人の急襲から身を守るための地下トンネルとして使われるようになってきたと考えられています。

ビザンティン帝国時代に敵襲が増えると、カッパドキアの地下都市は保護や宗教的な目的で集落として使われました。4 世紀にローマ時代の国教となるまで、キリスト教徒が迫害から隠れる場所として使われたこともあります。

地下都市の内部にはいくつもの部屋があり、廊下でつながっています。

カッパドキアの地下都市について書かれた最も古い書物はアナバシスのクセノポンで、アナトリアの人々は家族全員が生活し、家畜を飼い、食物を蓄えられる広さの地下の家に住んでいたと述べています。

続いて、デリンクユ・カイマクル・オズコナック・タトラリン・マズ・オズルジェ各都市の概略が書かれている。

また、和田浩之氏による「カッパドキアの地下都市の住環境に関する研究」 https://tsujimoto.sub.jp/pdfNagoya-Sotsu/95Wada.pdf もある。

インドの石窟寺院

デカン高原とバーミヤンにそれぞれ 1000 以上の石窟がある。石窟群はどう勘定しているのか。恐らく石窟の数を数えているのではないか。

石窟寺院は BC2 世紀に現れた。これ以前の寺院は他宗教との寺院と共存している場合を除き破棄された。発掘され礎石のみが残っている。

石窟寺院を造るためには、先ず、それに耐える巨大な岩盤があることが最低の条件である。インド亜大陸には最大の岩盤がある(?)。

巨大な岩盤があるところでは、石を切り出して、平地に運び、寺院を造るよりも、切り抜いて、石窟寺院とするほうが楽であったかもしれない。

仏教発祥のガンジス川中流域ではこのような岩盤はなかかもしれない。

初期の寺院は普通の寺院で、仏教がデカン高原地帯に伝わった後、石窟寺院が造られるようになったと考えるのが妥当なようである。

アジャンターの初期仏教石窟は紀元前 2 世紀にできた。Wikipedia「アジャンター石窟群」

石窟寺院は仏教が伝わる前からあったかもしれない。

この頃はまだ仏像は現れていないとはずである。

中部(デカン)高原地帯には 1000 以上の石窟寺院が残されている。

乾燥地帯では洞窟住居はかなり快適であるそうだ。

Wikipedia「クシャーナ朝」では、

クシャーナ朝は中央アジアに興り、インダス川の上流地帯からインドの北部までを最大版図とした。カニシカ王(2C 後半)のもとで隆盛期をむかえた。この頃には、大乗仏教が確立し、中央アジアに伝播したと思われる。

Wikipedia「グプタ朝」では、

グプタ朝 (320-550)では、ヒンドゥー教を国家の柱として位置づけた。

この後、仏教寺院は仏教の衰退とともに破壊・放棄されたと考えられる。インドでは弾圧はなかったようだ。

石窟寺院の古いものはグントゥパッリ石窟、バージャー石窟、アジャンタ前期である。

「テーマ別インド旅行記」では、カジュラーホ(11)、エレファンタ島(2)、エローラ石窟寺院(6)、アジャンタ石窟寺院(2)、以下にも仏像写真あり、2013/03 グジャラート州訪問記(3+6)、2011/12 ラージャスタン州訪問記(15)、2010/11 12日間インド旅行記(28)、2008/12 11インド旅行記(22+11)

「南アジアへの招待」では、仏教美術＞仏教の聖地、バールフットの仏教美術、ガンダーラの仏教美術、西インドの仏教石窟寺院、アショーカ王柱(この下2つ目が写真集で pdf file がダウンロードされる)

インドの石窟寺院」では、基本情報、 ホテル、世界遺産、インド仏教聖地、石窟寺院、地図、デリー、アウランガバード、アグラ、アジャンタ石窟、アーマダーバード、ウダイプル、エローラ石窟、カジュラホ、コルカタ、サンチー、ジャイサルメール、ジャイプル、ジョードプル、チェンナイ、バラナシ、ブッダガヤ、 ムンバイ

「アジャンター石窟群」＜インドの世界遺産＜AllAbout

「アジャンター石窟群の絶景写真画像」2つの動画

Wikipedia「アジャンター石窟群」、「エローラ石窟群」、Wikipedia「サーンチー」

「サーンチーの仏教遺跡」では、他宗教の寺院と共存したため、残っているということである。

Wikipedia「マトゥラー」、「ガンダーラ」、

「バーミヤン渓谷の文化的景観と古代遺跡群」

The page of Taka＞「タキサラ（ガンダーラ仏教の中心地）散策」では、

ペシャワール付近には、ジョーリアン、モラモラデゥー、シルカップ、ダマラジャカストゥパ等の仏教寺院遺跡

エデンの彼方を探しに行こう「岐路のパキスタン」では、ジョーリアン、シルカップ、ラホール博物館

「エレファンタ島石窟」＜インドの石窟寺院

「エレファンタ島石窟」＜Wada フォトギャラリー：旅紀行

「ハンピの旅行記・ブログ」他宗教の石窟寺院多数

ハンピ遺跡１，２，３，４，５、ホイサレーシュワラ寺院、チェンナケーシャヴァ寺院、バーダミ石窟寺院１，２、アイホーレ１，２、パッタダカル

同じレヴェルに、インド ラダック、南インド、インド周遊、インド・グジャラート、スリランカの旅、ラオスの旅、中国 新疆ウイグル、中国 貴州、ベトナム

4.3. 仏像の出現

%% 以下は、宇野 茂樹「仏教東漸の旅 -はるかなブッダの道-」により全面検討する。

Wikipedia「各国の仏教寺院」

仏像はBCI世紀頃にインドのインダス川上流地域で造られだした。これより古い寺院で仏像が残っている場合、仏像は少なくともBCI世紀以降に造られたことになる。

Wikipedia「ガンダーラ」、「マトゥーラ」

仏像はギリシャ文化の影響を受けて造られるようになったとされている。ギリシャ文化のインドへの影響は、紀元前327年のアレクサンドロス大王によるガンダーラに侵攻とする。仏像は、必ずしも、寺院に祭られている必要はないが、初めは寺院で祭られたと想う。個人が仏像を祭るのはかなり後のことと思われる。

初期を除き、仏像は石窟を含む寺院にある。逆も殆ど成り立つと想われる。

インドには寺院と石窟寺院だけで、磨崖仏は無いと思ってきたが、Web

の写真ではインダス川上流の山岳地帯には磨崖仏があるようだ。

石窟を掘る程の岩が無い場合、崖に石仏を刻み、前堂を造ったのではないかと想われる。雲岡・龍門と富山の日石寺栃木の大谷寺等である。ここでは半石窟寺院と呼ぶことにする。

この前堂の部分がなくなったものが磨崖仏ではないか。後にこれを見た人は崖に仏像が彫られていると思い、これを聞いた人が崖に仏像を彫っていたと思われる。

大足の石仏湾はこれと ??? の石窟寺院よりはっそうされたのではないか。大足には、石室を造り中央に石仏を置き、壁面にレリーフを刻んだ形式のものもある。韓国の石窟庵も同様と思われる。

バーミアン、楽山、普光寺・熊野のような大磨崖仏の起源はどこか。タイには大涅槃仏がある。

Wikipedia「ワット・プラチェートゥポンウィモンマンカラーラーム」、(ワット・ポー)「石窟」、「磨崖仏」

紀元前 330 年頃にアレクサンドロス 3 世（大王）の遠征軍がペルシャを越え北インドまで制圧し、ギリシャ文化を持ち込んだ。その後も紀元前 2 世紀にはグレコ・バクトリア王国のギリシャ人の支配を受けるなど、西方文化の流入は続いた。Wikipedia「仏像」

西北インドのガンダーラ地方と北インドのマトゥーラ地方(現在はパキスタン)に仏教が伝わると、仏像が盛んに造られるようになったことから、この 2 つの地域に仏像の起源は求められている。

カンダーラはペシャワール(パキスタン)が中心。マトゥーラはニューデリーの少し南。

仏像が盛んに造られるようになったのは、紀元後 1 世紀頃からインドを支配したクシャーナ朝の時代であることはほぼ定説となっている。
Wikipedia「クシャーナ朝」、「カニシカ I 世」(カニシカ王: 2C 後半)

大雑把にまとめれば、紀元前後にインダス川の(中)上流地域で仏像が造られだした。紀元後 1 世紀頃に盛期を迎えたということである。
Wikipedia「ガンダーラ」にはこの頃に製作された仏像の写真がある。
Wikipedia「マトゥーラ」

Wikipedia「仏像」にあるこの頃の石仏 2 体の写真からは、丸彫りと思われる。仏像の出土状況は報告されていない。恐らく、平地(市街地)の寺院遺跡にあった可能性もある。

[1]では四大聖地うちのサールナートでは発掘された仏像が博物館に陳列されている。これらは遺跡の一室でまとまって発掘されたということである。カニシカ王 3 年の銘があるのがある。

よく知られているのは石窟寺院である。この時代の石窟(仏教)寺院は、

グントゥパッリ石窟、カルラー石窟一期、バージャー石窟、アジャンタ前期等である。Wikipedia「石窟群」

(インド共和国西デカン地方における小規模仏教石窟群の踏査(I) 関西大学学術リポジトリ)

Wikipedia「バーミヤン渓谷の文化的景観と古代遺跡群」によれば、古代から存続する都市バーミヤーンの近郊には、I 世紀からバクトリアによって石窟仏教寺院が開削され始めた。石窟の数は 1000 以上にものぼり、グレコ・バクトリア様式の流れを汲む仏教美術の優れた遺産である。

インド亜大陸においては、仏教寺院は殆どが放棄・破壊?された。(?)残っていたものは、他宗教(ジャイナ教)と共存したものであろう。

石窟寺院以外の仏教寺院(市街地に建てられた仏教寺院)は少ない。八大聖地・五大精舎とサーンチのようなアショカ王が建てた釈迦の遺骨を祭った仏塔を中心とする寺院以外は殆ど知られていない。殆どないといっても良いような気もする。

インダス川流域の都市遺跡は殆ど砂に埋もれている。今後発掘される可能性は残っているが、市街地には仏教寺院は無かった可能性もある。

初期の釈迦像はどこで発見されたのか。

石窟寺院はインダス川上流地帯(パキスタンからアフガニスタン)にも数多く残されている。

「タキサラ（ガンダーラ仏教の中心地）散策」ではペシャワール付近には、ジョーリアン、モラモラデゥー、シルカップ、ダマラジャカストゥパ等の仏教寺院の遺跡があり、仏像も残されている。これらの遺跡は、郊外の小高い丘の上にある。タキサラ博物館には仏像がある。遺跡も含めて、年代は記されていない(わかっていない?)が、初期(キリシャ風)のものが見られる。

壁は大小の石積みで、大きな石には仏像が圧肉彫りで刻まれている。天井は分からないが、石窟寺院を模したものかもしれないという印象を受ける。

4.4. カニシカ王

Wikipedia「クシャーナ朝」

クシャーナ朝は、中央アジアから北インドにかけて、1世紀から3世紀頃まで栄えたイラン系の王朝である。

紀元前 2 世紀、匈奴に圧迫されて移動を開始した遊牧民の月氏は、中央アジアのバクトリアに定着した。これを大月氏と呼ぶ。漢書西域伝によれば、大月氏は休密翕侯・貴霜翕侯・雙靡翕侯・肸頓翕侯・高附翕侯の五翕侯を置いて分割統治したという。それから 100 余年後、五翕侯のうちの貴霜翕侯が強盛となり、他の四翕侯を滅ぼして貴霜王と称すようになった。

大月氏の諸侯はそれぞれコインを発行していたが、貴霜翕侯が発行したコインは他の諸侯の発行したコインに比べ数も多く、大型のコインは貴霜翕侯の物しか鋳造されなかった。

Wikipedia「カニシカ王」より王の出自と仏教の記事を引用する。

カニシカの出自は長く不明であった。カニシカ以降の貨幣銘文へのインド文字使用停止やホータン出身地説、小月氏説などの各種根拠により、カニシカは前代までの王(クジュラ・カドフィセス、ヴィマ・カドフィセス)と血縁が無く、王位を簒奪して新たな王朝を築いたという、王朝断絶説は有力であった。

ホータン出身地説の根拠の一つは、カニシカと同時代人で、王の三智人の一人であ

る仏教詩人アシュヴァゴーシャ（馬鳴）の作と伝えられ、カニシカ王の没後間もなく創られたらしい大荘厳教論 6 に、我昔曾聞 拘沙種中有王 名真檀迦膩 討東天竺 と記す。真檀とはホータンの古名であり、迦膩吒とはカニシカを指すことから、真檀迦膩吒ではホータン出身のカニシカとなることが挙げられた。

しかし、1993 年にアフガニスタン北部のラバータクで発見されたギリシャ文字バクトリア語碑文(ラバータク碑文)発見により、カニシカはヴィマ・カドフィセスの息子であることが確認された。

カニシカ王が仏教を保護したことは多くの仏典に記録されている。仏典の伝説によれば、カシミール地方の王にシンハと言う人物がおり、仏教に帰依して出家し、スダルシャナと称してカシミールで法を説いていた。カニシカは彼の噂を聞いてその説法を聞きに行き、仏教に帰依するようになったという。カニシカ王は各地に仏塔を建造したことが知られているほか、彼の治世に仏典の第四回結集(第三回とも)行われたとも伝えられている。

同じく仏典の記録によれば、カニシカ王は中部インドに遠征軍を派遣し、攻撃させた。同地の王は和平交渉を行い、カニシカ王は 3 億金を要求した。同地の王がこれを支払い不可能であると回答すると、カニシカ王は 2 億金を減額する代わりに、宝の仏鉢と、サーケータ出身の詩人アシュヴァゴーシャを送るように要求した。アシュヴァゴーシャは同地の王に、広く諸国に仏道を弘める道理を説き勧めた。中部インドの王は 2 つの宝をカニシカ王に与えることにした。こうしてカニシカ王の下に来たアシュヴァゴーシャは、カニシカ王の手厚い待遇を受け、大臣マータラ、医師チャラ

カと並んで「三智人」とされ、カニシカ王の親友となり、カニシカ王の精神的な師となった。

日本や中国の仏教徒の記録ではカニシカ王は大乗仏教を支持していたとされるが、実際には大乗仏教とカニシカ王の関係はあまり強くなかったらしい。アシュヴァゴーシャの残した作品などから、カニシカ王の支持した仏教とは伝統的保守仏教、特に説一切有部であったといわれている。

実際にはカニシカ王は仏教だけではなく、他の宗教との関係も濃密であった。彼の発行したコインにはシヴァ神・太陽神・月神・スカンダ神・ヴィシャーカ神・火神・風神など伝統的なインド等の神の図像が表わされている。また、彼の支配した時代のタクシラにはおそらくゾロアスター教の拝火神殿と思われる建物も存在している。

Wikipedia「カニシカ王の舎利容器」

カニシカ王の舎利容器は、銅箔で全面を覆われた仏教遺物で、製造年代はクシャーナ朝のカニシカ王統治元年(西暦 127 年)にまで遡る。この遺物は 7 世紀、中国の巡礼によってインドで最も高い仏塔と記録された、ペシャーワル郊外のシャージーデリー遺跡の発掘(1908 年-1909 年)中、カニシカ王のストゥーパの地下に埋もれた小部屋から発見された。中には釈迦の 3 つの骨片が入っていたといわれ、1910 年に英国の発掘隊によってビルマへ運び出された。それは現在、マンダレーで目にすることが出来る。舎利容器自体は現在ペシャーワル博物館に保管されている。また複製が大英博物館に所蔵されている。

舎利容器にはカローシュティー文字で銘文が刻まれている。銘文の内容は,カニシカプラ(現ペシャーワル)のマハーラージャ カニシカにより説一切有部の尊師らにこの価値ある香箱は奉納される、といったものである。

容器の蓋には脇侍に梵天と帝釈天を従えた蓮華坐に趺坐する釈迦が描かれている。これは「梵天勧請」を描いたものと思われる。蓋の縁には霊魂の旅立ちと無常からの解脱を意味する「飛行するガチョウ」のフリーズで装飾されている。何羽かのガチョウは口に勝利のリースをくわえている。

1910 年、ペシャーワルのカニシカ王のストゥーパから発見された仏舎利容器の側面にはクシャーナ朝の君主(おそらくカニシカ王自身)とその脇に控えるイランの神'(日神と月神)が描かれている。そのそばには着座した仏陀と、仏陀を崇拝する菩薩と見られる王侯風の人物が描写されている。天使に祝福されたガーランド(花の装飾)が場面のあちらこちらにちりばめられ、典型的なヘレニズム様式を呈している。

Wikipedia「説一切有部」

説一切有部は、部派仏教時代の部派の一つ。略称は有部。説因部[ともよばれる。紀元前 1 世紀の半ば頃に上座部から分派したとされ、部派仏教の中で最も優勢な部派であったという。同じく上座部系とされる南伝の上座部大寺派と並んで、多くのアビダルマ文献が現存している。

主体的な我(人我、アートマン) は空だが、現象世界を構成する要素 (法、ダルマ) は三世に渡って実在するとした。説一切有部は大衆部や経量部と対立し、大乗仏教か

らも批判されたが、大きな勢力を保った。

あとがき